

第20回

監修・執筆 落合一泰

大航海時代

今回学ぶこと

1492年、スペインの港を出航したコロンブスは大西洋を西に進み、カリブ海の島々に到達した。その後アメリカ大陸に進出したスペインは、栄えていたアステカやインカなどの国家を征服し、キリスト教の布教、銀山開発などを行った。メキシコでは、植民地時代の300年間に混血が進み、広くヨーロッパ文化が根づいていった。今回は、アメリカ大陸の人間や文化に目をみはったヨーロッパ人の経験についても考えよう。

調べておこう・覚えておこう

- コロンブスの航海の独創性は何だったのか調べてみよう。
- アメリカ大陸原産で、今の私たちの食卓を豊かにしている食品を調べてみよう。
- 外来の宗教が新しい土地に根づくとは、どのようなことなのか。日本の「マリア観音」なども例に調べてみよう。

コロンブスのアメリカ到達

11世紀から13世紀にかけてキリスト教徒は十字軍を組織し、ムスリムが支配していた聖地エルサレムの奪還を目指した。しかし、一時期を除きキリスト教徒は目的を果たせず、聖地奪還のエネルギーはバルト地方などヨーロッパ北東部へのキリスト教布教へと形を変えていった。それはイベリア半島を支配していたイスラム教徒との戦いにつながり、勝利のあとは海のかなたへの布教へと連続していった。このような布教熱や航海技術の発展に後押しされ、15世紀から17世紀にかけてヨーロッパ人は世界各地に船団を送った。それを大航海時代と呼ぶ。

世界の形状や各地の人間や産物などを知ったことが、その後の時代にヨーロッパ諸国が世界に進出し植民地を増やしていく基盤になった。

コロンブスが航海に出る1492年に先立つ1488年、ポルトガル人バルトロメウ・ディアスはアフリカ大陸最南端の喜望峰に到達し、新たな香辛料貿易ルートの開拓を進めた。コロンブ

スは大西洋を西に進んでアジアに行こうとした。スペイン王室などの支援を得たコロンブスは4回の大西洋横断航海を行ったが、死ぬまで自分が到達した土地はアジアのどこかだと信じていた。アメリカ大陸をアジアと誤認したコロンブスは当時評価されず、それを「新大陸」と見抜いたフィレンツェ出身の航海者アメリゴ・ヴェスプッチが「アメリカ」に名前を残すことになった。コロンブスが再評価されたのは19世紀のことだった。

アステカ、インカ帝国

スペイン軍はメキシコ地方に強大な王国を築いていたアステカを1521年に征服し、1534年にはアンデス地方のインカ帝国を支配下に置いた。ヨーロッパ人がもたらした天然痘、インフルエンザ、百日咳などに免疫がなかった先住民の間では、戦死者以上に病死者が多く、全住民が死亡した地域もあった。アメリカ大陸の先住民人口は、今なおヨーロッパ人到来時の水準を回復していないと言われる。

命を懸けてアメリカ大陸に渡った征服者たちは、黄金のような目の前の利益を求めた。先住民社会にはキリスト教や統治システムなどヨーロッパ文化が強要された。植民地時代を通じて支配者と被支配者のあいだには深い溝が掘られ、新たな社会体制のなかで先住民の諸権利は尊重されず、先住民やアフリカ系奴隷の血を引く者の社会的上昇は制限されていた。

ヨーロッパの外に広がった「ヨーロッパ文化」

征服後、各地の先住民は強制された新たな社会システムや西洋文化を吸収し、自文化の中に組み込んでいった。キリスト教、スペイン語やポルトガル語、行政制度などの受容、教会や役場が面した広場を中央に置き、碁盤の目のように直交する道路を配置した街づくり、羊や牛、小麦やバナナなどヨーロッパ人が移入した家畜や農産物の定着などにも、先住民社会は創意工夫をこらした。

当初ヨーロッパ人は、外の社会の文化や習慣をすべて否定したが、次第にその土地におけるその意義を認めるようになった。これを文化相対主義という。他方、キリスト教を中心とするヨーロッパ文化が他の文化に優越するとも考えていた。ヨーロッパを絶対視するこの考え方と文化相対主義は矛盾するが、それを解消する考え方として社会進化論が生まれた。社会は一本のはしごを上るように進化・発展するのであり、ヨーロッパははしごの頂点に位置し、他の文化ははしごのどこか途中にあるとみなした。このように、社会進化論はヨーロッパの卓越と非ヨーロッパ諸文化の相対的な位置づけを可能にした。今では受け入れられない考え方だが、ヨーロッパ人は大航海時代を通じて得た知見を社会進化論に沿って整理するようになった。